

人は誰を好きになってもいい

山南中学校 二年 西中 遼真

夏休みのある日、お父さんが兵庫県人権教育研究大会丹波地区大会の講演にオンライン参加すると聞いた。僕も気になったので一緒に見ることにした。それは「僕は父親になった～自分らしく生きること～」と言う演題で前田良さんという方の講演だった。

その人は女性として生まれ、二十歳の時に「性同一性障がい」との診断を受け、その後名前を変え、パートナーと出逢い、性別を男性に変えて結婚された。子供は出来ないけど父親になりたいと思いA I D「非配偶者間人工授精」により子供を授かった。しかし出生届が受理されず裁判を始めることにした。「血縁を大事に」するという判断により却下、棄却と決定されたが、最高裁にて逆転勝訴し二人の子供の父親となったという経歴の方だ。

司会者の紹介の後に登場された前田さんを見て僕はびっくりした。誰が見ても男性にしか見えなかったからだ。声も男性の声だった。本当にこの方は女性として生まれた方なのだろうか。

前田さんは夏休み中の子供達も一緒に連れてきているので、もしかしたら顔を出すかもしれないと話された。一人は僕と同じ中学生の子供らしい。自分のお父さんが女性だったという事実を受け入れている子供はすごいと思った。周りの友達から、いじめられたりからかわれたり嫌な思いをすることはないのであるか？と思った。

結婚して子供をもうけたときに、世間から「かわいそうな子ができた。自分勝手だ。」と多くの人に言われたそうだ。二人目の子供をもった時には「かわいそうな子がまた増えた」とも言われた。

もし自分の父親が元は女性であったと聞かされたらどう感じるか想像した。が、自分は何も変化はないと思った。過去がどうであれ父親は父親だ。血がつながっているから幸せなのではなく、幸せなら血縁の事など気にならないと思った。

しかし、周りの人には知られたくないと思った。なぜならそれが原因でいろいろ噂されたり、いじめられたりすると嫌だと思ったからだ。自分は父親のことを受け止められても周りの人は偏見を持ち理解をしてくれることは少ないだろうと思うからだ。

そのように思うのは、やっぱり性的少数者への差別があると思うからだ。人は生まれた時に割り当てられた性別らしく生きて、男性は女性を、女性は男性を好きになるのが普通であり、それ以外は異常でおかしいといった固定観念を持つ

ている人が大多数いるからだ。前田さんはそんな差別に苦しんできた。

LGBTについて聞いたことはあるけれど興味があるわけでもなかったの、詳しく知ろうとしなかった。今回、前田さんの講演を聞いて、性的少数者の方の苦しみを知ることができた。

そして、最後に印象的だった言葉は、

「もしあなたの友達やこれから出会う人が、自分がLGBTと打ち明けてくれたときに理解しようとしなくていい。でも、否定はして欲しくない。そんなひとがいるんだとわかってくれればそれでいい」と話されたことだ。

僕はその言葉を聞いて少し安心した。理解をしてあげることがまだ難しいと思ったからだ。理解ができなくても、僕はLGBTの人たちを差別しない。悩んでいる、苦しんでいる人たちがいることを知ったからだ。そんな人たちがいることを多くの人を知り、間違った偏見を持たずに接していける世の中になればよいと思った。

これから僕は当たり前前のが当たり前ではなくなることを理解する必要があると思う。人は必ずしも異性のことを好きになるわけではなく、人によって好きな人は違うからこれからLGBTの人に出会っても否定したり軽蔑したりしないようにしてその人を認めてあげられるようになろうと思った。